



# ユマニチュード

Humanitude ~ 人の尊厳 ~

永田円了

「世の中のお役に立つ人になりなさい」私たちの世代は、親からそう言われて育った。勉強しなさい、仕事をしなさい、人の役に立つ人間になりなさい。自分だけのために生きるのではなく、誰かのために働く。社会の役に立つ。そうして初めて、人間として一人前になれる --- 私たちは、そんな価値観の中を生きてきた。しかし、その言葉の裏側には、いつの間にか、こんな考えが潜んではいなかったか。-----「役に立たない人間は、価値がない」と。

**10 年前、相模原の障がい者施設で、19 人の尊い命が奪われた。**犯人は、被害者個人を恨んでいたわけではなかった。彼の中には、「社会に役に立たない人間は、生きていても意味がない」という、恐ろしい思想があった。

作家・辺見庸氏は語る。私たちは本当に、犯人とは無関係な人間なのだろうか。「役に立つ人」と「役に立たない人」を、私たちは日常生活の中で、無意識に選別してはいないだろうか。かつて日本には、優生保護法という法律さえ存在した。よい社会をつくるという名のもとに、人間を「生まれてきてほしい人」と「生まれてきてほしくない人」に分けていたのである。その法律はなくなった。しかし、その空気までなくなったのだろうか。



**自坊、真国寺には障がい者の作業所がある。**毎日、10 人ほどの修行生（利用者のこと）が、4000 基もある広大な墓地の清掃作業をする。よく働く人もいる。ほうきと塵取りを手し、ただ立っている人もいる。一日草の上に座り込んで、ぼんやりしている人もいる。その姿を見ながら、私は時々、自分の心の中にある「ものさし」に気づかされる。「今日は、何をしたんだ」「これだけしか働いていないのに、給料をもらっていいのか」そんな思いがふと頭をよぎる。しかし、その瞬間、自分自身に問い返す。----- 人間の価値は、今日どれだけ仕事をしたかで決まるのか。思うに、自分自身だって、いつまでも「役に立つ人間」でいられる訳ではない。

**私には 3 人の姉がいる。**いまは皆、寝たきりになった。3 番目の姉は、うるさい程よくしゃべる人だった。その姉が、脳出血で倒れ、いまはもう話すことはできない。この先どれだけの時間を、ベッドの上で過ごすのだろうか。何かを生産するわけでもない。誰かの役に立つ訳でもない。ただそこにいる。けれども ---- 「ただそこにいる」ということは、本当に「何もしていない」ことなのだろうか。

「生まれちゃったもんで生きている」「本来生きること自体に意味などない」「ただ人間は、そこにいろんな意味がほしいので、生きがいをつくっているのだ」と、作家・玄侑宗久氏は言う。一見すると、冷たい言葉のように聞こえる。しかし私は、そこに不思議な安堵を感じる。「何かのために生きなければならない」という重荷を、少し軽くしてもいいのではないか。人は誰かとの関係のなかで生きる。誰かの役に立つことは、生きる喜びにもなる。けれども、それを逆さまにしてはいけない。「役に立つから、生きていていい」のではなく、まず生きている。そこに人がいる。だから、その人を大切にします。

**フランス語で「Humanitude (ユマニチュード)」という言葉がある。**「人間らしさ」という意味である。認知症の人に、目を合わせる。言葉をかける。触れる。そして、その人を「介護される人」ではなく、一人の人間として遇する。障がいのある人にも。老いた人にも。病に倒れた人にも。そして、やがて何の役にも立たなくなる自分自身にも。人間は、「役に立つ存在」である前に、「存在している人間」なのではないか。そう考えたとき、目の前にいる人の姿が、少し違って見えてくる。草の上に座り込んで、一日を過ごす修行生。ベッドの上で、何も語らなくなった姉。そして、いつか何もできなくなる自分。「何ができるか」ではなく、「あなたが、ここにいる」。そのことをお互いに認め合う。もしかすると、それこそが「人間らしさ」の出発点なのかもしれない。

## < 事例 >

マザーテレサ／道ばたで死にゆく人に、  
E テレ「相模原事件から 10 年、私たちに残された課題とは  
作家、辺見庸／「在る」に価値や意味を強制する社会とは、  
作家、玄侑宗久／ただ生まれちゃったもんで、生きている  
歌・クミコ「愛しくないとき」

円了のホームページ: [www.enryo.jp](http://www.enryo.jp)

